フロイトの影響について (1)

——アメリカ社会学研究の一節——

宇　賀　　博

1

1890年代，ヨーロッパの思想は新しく意識 (consciousness) の問題をめぐって展開しはじめる。すこし言葉を加えれば主観的なものへの関心（＝実証主義への反逆）とでもいおうか，スチュアート・ヒューズによれば，「……知的関心は，社会思想の軸を，目に見え客観的に検証できるものから，説明しがたい動機づけの部分的にしか意識されない領域へと移しかえてしまったのだ。この意味において，新しい諸学説は明らかに主観的なものであった。心理的過程が，外的現実に代って緊急の探求課題となった。」[1] それは，社会科学の思想のうえからは実証主義の束縛からの解放ということでもあった。この1890年代という時代は，芸術的・文学的な領域では，いわゆる「世紀末」としてシンボライズされ，よく知られるように，それは爛熟の時期，ひねくれ気取ったデカダンスの時期，ひとつの時代の終末の時期であった。

一九世紀末は，ある一つのタイプの知的活動が終って，別のタイプの活動がはじまった時期である。「歴史には，多数の先駆的な思想家がいちどきに輩出する時期がある。かれらはふつう，仕事はそれぞれ独立にやっているのだが，そこに提出される人間の行為についての見解がその時代の一般的通念とまるでちがっており，しかもそれらの新見解相互に関連性があるものだから，あたかもかれらは協力して知的な革命を遂行しているかに見える。1890年代の十年間は，まさしくそういう時期のひとつであった。」[2] たとえば，つぎの世代の著名な社会思想家たち——フロイト，クローチェ，パレートなど——にとって，「人間の感情の非合理的な，そして実質的に変化することのない性質」こそが，決定的に重大な関心事であったし，そこでは，一八世紀的な理性的人間像は，時代おくれの妄想として放棄されることになった。だから，うえの実証主義への反逆は反主知主義のムーヴメントともクロスしていて，それは，一方で，例のロマン主義の心情と姻戚関係をもちながらも，あるいは保守反動の思想への危険をはらみながらも，他方で，すごく新鮮な，新しい思想の分野をきり開いたものであった。たとえばヒューズによれば，

> かれらの移行しつつある過渡的な観念世界においては，意識の問題が早くから重要な問題として提起されていた。社会の観察者の主観的な態度がだんぜん大きく前面に出てきたことを指摘するのは，この時期の知的性格を規定するもうひとつの仕方であるだろう—本書の標題「意識と社会」（かれの本の書名—引用者）はそこから由来している。以前には一般に，そうした態度が深刻な問題を提出することなどはないと考えられていた。理性主義者も経験主義者も同様に，社会過程における行動者と観察者との間の見解の一致は認めていたし，その共通の態度が科学研究ないしは功利主義的倫理により要請されたものであるとする点では同意見であった。それ以外のいかなる立場も，不当な情動の侵入として却下し無視してかまわない，と論ぜられていた。ところが，やや唐突に，多数の思想家たちがそれぞれ別個に，こうした情動をくり込むことが，たんに外来的なことがらであるのではなく，むしろ問題の中心的要素であるのではないかどうか，と疑いはじめたのである。漸次方向を見定めながら——そしてしばしば本来の意図にもさからいながら——かれらは，人間の行為における主観的な「価値」の重要性の発見にまで導かれていった。[3]

このような「価値」の重要性にまで範囲をとれば，マックス・ウェーバーもまたうえの文脈から

は重要な思想家の一人である。たとえば，その意味で，パーソンズの『社会的行為の構造』(1937)は興味ぶかい議論を提出しているし，そしてまた，「……1890年代の世代の場合には，解明のための主要な試みは認識論の形而上学において基礎づけられ，最後には心理学ないし社会学というところまでいった」といわれている。そしてこれらのことは，パーソンズの社会学思想におけるフロイトの位置を知るうえで，きわめて大切な議論である。それは具体的にどういうことか。あとでパーソンズの voluntaristic な社会学思想を論じるさいに，このことにはふれてみたいとおもう。

さて，新しくヨーロッパ思想が「意識」の問題をめぐって展開されたという，その背景には，一九世紀の70年代からの，まさに資本主義体制の危機という歴史的な背景があるといわれ，そしてその反映ではないかといわれているが，「少なくとも一九世紀末から大戦までの西欧世界の動揺と頽廃の現実，あるいはその動揺と頽廃を目のあたりに見たフロイト，これらの条件から，一八・一九世紀的人間理性への信頼がもろくも崩壊した以上，理性的な自我だけをもって人間存在は規定出来なかった」[4]のである。たとえば，哲学思想のうえでも，一九世紀前半におけるヘーゲル哲学の崩壊，そして新しく史的唯物論が生れるけれども，しかし他方，非合理主義的な主観主義の哲学も生れてくる。後者としては，ショーペンハウエルの生の哲学や，あるいはキルケゴールの実存哲学が，また別な意味で，批判主義の新カント派の観念論がそうであった。そして，それらのいくつかは，一九世紀後半のヨーロッパ市民社会の挫折をペシミスティックに反映していた。また，オーギュスト・コントの社会学思想についてみても，「……一九世紀実証主義が一八世紀の啓蒙合理主義のアンチテーゼとして登場したこともまた哲学史の常識である。啓蒙“合理主義”は唯物論だったが，コントの“実証主義”の頂点はかえって，観念論であった。マルクス主義は合理性と実証性の対立を“弁証法的”に止揚した唯物論であり，また，もっぱら普遍概念に依拠した自然法思想と，その反借定として歴史的特殊性に着目したロマンティークとの対立を，ヘーゲルのように“観照的に”でなく，“実践的に”統一した世界観だともいわれる。」[5] ヨーロッパ近代史のうえで，1948年の革命につぐ転換期は，1870年であった。この年は普仏戦争がはじまり翌年にはフランスの敗北によって，一方ではビスマルク体制のもとでドイツ国家統一が完成し，他方では，ほんのひとときであったが，史上最初の労働者政権＝パリ・コンミューンが成立した。資本主義はほぼこの時代から独占段階にはいる。だからまた，よく知られているように，経済学思想のうえからいっても1870年代はひとつの転換期であったし，たとえば，メンガーの『国民経済学原理』(1871) やジェヴォンズの『政治経済学の原理』(1871) や，また，数年おくれてワルラスは『純粋経済学要論』(1874—77) を書いた。つまり，いわゆる主観学派の経済学がはじまった。

たとえばフロイトの思想も，うえのような時代の転換という一九世紀後半の背景をぬきにしては考えられないのではないか。「フロイトの自我論は，一八・一九世紀的人間観，合理的人間観，要するに近代市民社会的人間観が，客観的にも主観的にも崩壊し去った後に，主観的には新しい人間観の確立を目指した自我論であった。もはや理性的人間を構想することはできなかった。しかし，自我に含まれている≪自我≫＝理性をまったく無視しうるほどには徹底したペシミストたり得なかった危機の時代の西欧的知性，すなわちフロイトが，冷徹な観察と，人間への祈りにも似た期待が一致点を見出したのが，この自我論であった。」[6] ヒューズもの べているように，一方の観点からすれば，フロイトの思想は啓蒙思想から引き継がれたオプティミズム的な予想を放棄させるもののようにみえるけれども，他の観点からすれば，まさしくそうした予想の勝利を立証するものであった。このパラドックスは「他のいかなるひとよりも啓蒙の合理主義の正当性の破壊者であると考えられたフロイトが，実はわれわれの世紀における最大の啓蒙の子であった」ということであって，なぜなら「かれの根本前提」は，「真理の探究は，決して止まることがあってはならぬ，知識のみが理性を働かしめ，理性のみがわれわれを自由にすることができる」ということであった。そしてヒュ

ーズは，つぎのようなフロイトの言葉を引用している。すなわち，

> 人間の本能に比べれば人間の知性はかよわいものだということを，われわれはいかようにも強調することはできようし，そうしても誤りではないであろう。しかしながら，それにもかかわらず，この知性の弱さにはある独特なものがある。知性の声は柔かく静かである。けれども，それを聞き入れられるまでは止まない。なんど拒否されても，最後には思うところを達成する。これが，人類の未来についてわれわれがオプティミスティックでありうるわずかな点の一つである。しかし，それだけでもこれはなかなかたいしたことである。われわれはこれを，さらに他の希望に対する出発点とすることができる。たしかに，知性の優位ははるかに遠いところでしか達成されないであろう。が，いかに遠くとも，おそらく無限の彼方ではないであろう。[7]

一方で，けっしてペシミスティックになりえなかった危機の時代の西洋の知性，すなわちかれフロイトの知性は，このように人類の未来への祈りにも似た期待をもちつづけていた。フロイトは，やはり「啓蒙の子」だったのであろうか。

ジークムント・フロイトは，1856年にモラヴィア地方（現在のチェコ，当時はオーストリア・ハンガリア帝国の一部）の小さな町のユダヤ人家庭の子として生れた。しかし四才のとき，両親がウィーンに移住したので，かれはそこで医学の研究と実地に全成年期をおくるのである。そして，当時のウィーンの町は，

> ……フロイトのヴィーンについて見ると，この精神分折の創始者の仕事もオーストリアの主都ヴィーンの著名で明白な諸特徴と連関づけようとする誘惑はほとんど抗しきれないほどである。事実，フロイトの性的・精神病的なものへの関心は，当時のヴィーンにおける生活の性格に帰せられたことはしばしばある。その性格とは，おそらく，アルトゥール・シュニッツラーの劇作にみられるような心を魅する力とエロチックな「デカダンス」との結合に，具体的に表現されていたものであろう。
>
> 1890年代初頭のヴィーン市民たちは，たしかに，シュニッツラーの芝居を——フーゴー・フォン・ホフマンスタールの詩やグスターフ・マーラーの音楽を鑑賞したのと同じく——楽しんだ。しかし，シュニッツラーやホフマンスタールやマーラーの町ヴィンーは，そのままフロイトのウィーンではなかった。フロイトが上にあげたひとたちのうちの二人と個人的な交わりを結んだことは事実である。かれは1906年以来，時折シュニッツラーと文通を交わしており，ひじょうに数もし，また，マーラーの歿するちょうど一年前の1910年，フロイトは，一時的強迫神経症の短期の（しかも成功した）治療をこの作曲家に施して評判になったことがある。しかし，これらは多忙な職業生活上のたがいに無関係な出来事であった。……フロイトは，ふつうの意味での知識人であるというよりも医者であり，しかもおそろしく研究熱心な医学者であった。ヘルマン・ヘッセやトーマス・マン，ロマン・ローラン，アルノルト・ツヴァイクなど著名な作家たちとの交友関係を結んだのは，やっと晩年になってからのことであった。若いころには，かれの交友範囲は，ほとんど自分と同じ医者——その大部分はユダヤ人か，自分の属していたユダヤ人会のメンバーに限られていた。それだけでなく，かれの患者もウィーンの社会を代表するようなものでは決してなかった。その大部分は，東欧からきた異邦人たちだったのである。
>
> フロイトの仕事に負わされたユダヤ人としての無力さ，またとくに，かれの大学教授任用を数年も遅らせた当局の偏見などには，当時のウィーンの醜悪な一面が示されている。オーストリア帝国末期の幾十年かに顕著な各民族・各階級間の反目は，ウィーンの街頭ではごくふつうのことになったユダヤ人排斥 anti-Semitism においてもっとも尖鋭なかたちをとるにいたった。フロイト円熟期のこの町は，ヒトラー青年期のウィーンでもあったのだ。[8]

さて，ヨゼフ・ブロイエル（1842—1925）との出あい，それはフロイトの生涯にとって大切な出来事のひとつであり，70年代の終りのことであった。かれはフロイトとの交際によって広く知られているけれど，たんにウィーンの有名な医師であったばかりでなく，相当な地位をしめる科学者であった。フロイトはかれを「豊かで広汎な才能をもち，その関心は職業的な活動領域をはるかにこえた広い人物」と評している。このブロイエルが，例のヒステリーの古典的な症例として認められるようになったアンナ・O嬢に治療をほどこしたのは，1880年12月～1882年6月ごろであった。フロイトは，このアンナ・Oの症例をきいて非常に興味をもち，それはかれの経験から余りにもかけはなれたことであったので，何度もブロイエルとそのケースの細部を論じあったものであった。それから約3年後に，パリに行ってシャルコと話

す機会をもったとき，かれはこの著しい発見について語ったが，しかしシャルコの興味をひきおこすのにまったく失敗した。これが，しばらくの間，この発見にかんするかれじしんの熱狂的な気持をにぶらせた原因である。けれども，他方シャルコから深い感銘をうけていた。「シャルコの教えからフロイトが受けたもっとも重大な感銘は，ヒステリーという問題に対するシャルコの革命的な見解である。事実それは当時シャルコが主として興味を感じていた問題であった。第一に，あれほどすぐれた神経学者が，この問題にそんなに真剣にたずさわるということがそれ自身驚くべきことであった。それは以前には，ヒステリーは，立派な医学者ならわざわざ時間を空費しない，仮病かせいぜい（それと大体同じものだと思われていた）“空想”の問題とみなされるか，または陰核の剔除によって治療され得る，また時には，……子宮の特異な病気とみなされていた。」しかし，この「シャルコのおかげで，ほとんど一夜にしてヒステリーは神経系の全く立派な病気となった」のである。シャルコの教えは，フランスの医学界に，そして，きわめて重要なことは，フロイドじしんにヒステリーにたいするより科学的な態度をとることを許した点において，疑いもなく成功をおさめた。たとえば，「彼＜シャルコ＞は，適当な患者には催眠術を使って，他の患者に見られるような，そして中世にも悪鬼に憑かれたせいであるとして詳細に記されてきたような，自発的なヒステリーの徴候と寸分違わぬヒステリーの徴候，麻痺，ふるえ，感覚喪失などを引き出すことができることを示したのであった。」そして，「全くこれらのことは，ヒステリーのまだ知られていない神経学的基礎がなんであるにせよ，徴候そのものは，想念だけによって，治療もされ，消されもされることを意味した。徴候は心因性の原因をもっていたのだ。このことは，患者の心理を調べるための医学的な動機への扉を開き，その半世紀の間に示された全ての分岐した結論をもたらした。そのことは心理学自体を，以前のアカデミックな基礎とは全くことなった基礎に置き，他のいかなる方法においても不可能であるような精神のより深い層に関する発見を可能にした」。かくてフロイトは，これらの発見に心をわくわくさせて1886年春，ウィーンに戻ったのである。[9]

そのごフロイトは，ブロイエルとの共同で1893年の一月に“Neurologisches Centralblatt”誌に「ヒステリー現象の心的機制について」という論文を発表し，ついで2年後に，例の有名な『ヒステリー研究』（1895）を書いた。この本のなかの精神療法についての一章が，一般にフロイトの精神分析のはじまりとみなされている。けれども「精神分析」という言葉がつかわれだしたのは，実際にはもうすこしあとのことで，それまでフロイトは自分の方法を「ブロイエルの通利療法」とよんでいた。（ちなみに，“精神分析”という言葉は，1896年の三月にフランス語で発表された「神経症の遺伝と病因論」にはじめて用いられ，ドイツ語では同年五月の「防衛神経精神症補説」という論文においてであったといわれる。）[10]しかし，二人のあいだにすでに分裂がはじまっていた。つまり，ブロイエルは，フロイトの行う患者の性生活の探求に，あるいはむしろ，フロイトがそこから引きだす広汎な結論についてゆけなかったのである。のちにフロイトじしんかれについて，つぎのように書いている。「神経症の原因について，ますますはっきりと性の重要性を私が主張しはじめた時，それに対して最初に嫌悪と拒否の反応を示したのがブロイエルであった。その後この種の反応に対してはすっかりなされてしまったが，当時はまだ，それが私のさけられぬ運命だとは気がついていなかった」。[11] ジョーンズはまた，こんなエピソードをしるしている。「医師協会（Doktoren kollegium）の集りで，ブロイエルがフロイトの仕事に好意的な暖かな態度で話をし，自分も性的病因についてフロイトの見解に賛成するといった。しかし，あとでフロイトがそれに感謝すると“私はその一言をも信じていない”といって背を向けて去った。二人の間柄は当然冷くなり，これ以上共同で仕事をすることはできなくなり，20年もの間，個人的な友人関係はよそよそしいものになった」と。また，フロイトは1896年の五月，ウィーンの精神医学神経学協会で「ヒステリーの病因について」という題の講演をした。それはその年のうちに補充されたかたちで出版され

たが，フロイトによればその論文は氷のように冷い受けとられ方にあったそうである。クラフト＝エビングが司会者であったが「科学的なおとぎばなしのようですな」といって満足した，と。[12]

けれども，やはりフロイトは天才であった。トリリングがいっているように，「精神分析が今日までに西欧の人間生活に与えた影響は測り知れぬものがある。ある種の精神の疾病の理論としてはじまった精神分析は，やがて精神そのものについての根本的に新しい重大な理論となった。……その考え方は，多くの場合には粗雑な形で，そして時には，ゆがめられた形ではあったけれども，一般の人びとの考えの中にも根をおろして，新しい用語ばかりか，新しい判断の様式を作った」[13] のであった。

2

フロイトの精神分析は，こんにちのアメリカにおいてもっとも広くかつ盛んに研究されているものの一つである。また，アメリカの生活や思考の「精神分析化」(psychoanalyzation) という言葉がつくられているくらい，アメリカの社会にはいり込んでいる。さて，フロイトの理論は，心理学や文化人類学といった他の諸分野とならんで，あるいはそれらとの連関において，アメリカの社会学にも同様に大きな影響を与えている。そして，そういうフロイトのアメリカ社会学への影響には，二つの段階を区分しうるのではなかろうか。おおまかではあるけれど，わたしたちは，(1)第一の時期（1909～1939）——フロイト理論が主として社会学における心理学的な諸概念と結びついて展開される時期と，それにつづいて，(2)第二の時期(1939～現在)——新フロイト派の発展と社会学における文化的な諸概念への影響の時期，この二つの段階を区分しうるのではないか，とこのようにおもっている。[14]

それでは，まず当初，フロイトの精神分析はアメリカの学界でどのようにとりあげられたであろうか。ジョーンズによれば，「何年かの間フロイトの著作はドイツの定期刊行物では無視されるか，軽蔑的な批評を受けるかであった。しかし，英語を話す国の書評には，たとえ，しばらくの間は何らかの形で彼の考えをはっきりと受けいれることにはいたらなかったにせよ，好意的で敬意を示しているものもあった。」たとえば，最初，フロイトの仕事を英語で説明した人は，イギリス人 E. W. H. マイヤーズであったといわれている。ブロイエルとフロイトの仕事が『神経学中央誌』に発表（1893年1月）されてから三カ月しかたたぬときに，マイヤーズは精神研究協会 (Society of Psychical Research) の総会で二人の論文がどういうものかをのべ，それはその年の6月の『会報』にのった。また4年後に，かれは同じ学会で「ヒステリーと天才」という講演をして，そのなかで二人の『ヒステリー研究』のことをのべた。このときは学会の『会報』にその要約がのったが，マイヤーズの死後，1903年にでたその著書『人間と人格とその身体上の死を超えた生存』のなかに詳細にわたって収められている。[15]

さて，マイヤーズがフロイトたちの『研究』を批評する前年，ブリストルの神経学者，ミッチェル・クラークは，雑誌『脳』——ずっとまえにフロイトも寄稿したことのある雑誌——にくわしい書評を発表していた。この書評は，神経学者たちの目にはほとんど止らなかったけれど，ジョーンズによれば，それをまじめに考えこころに留めた二人の読者がいた。「その一人がハヴェロック・エリスである。二年後彼はアメリカの雑誌に論文を発表し，その中で『研究』のことをのべ，ヒステリーの病因が性にあるというフロイトの見解を認めた。その後その論文は八年後にエリスの『性の心理の研究』の第三巻に収められた。1904年『性の心理の研究』の第一巻で，彼は“フロイトの魅力的で，実に重要な研究”と彼がよぶものに何ページかをあてた。彼はこの巻と次の巻（1906年）では，文献としてはっきり名をあげていないが，神経衰弱と不安状態についてのフロイトの論文にも言及している」。また，「他の一人は有名な外科医ウィルフレッド・トロッターである。彼の名は『平時及び戦時における群の本能』(1916年まで出版されなかったが，実は1904年に書かれたもの) によって心理学者のあいだに知られている。」このトロッターは，ジョーンズが1903年に精神病理

学を専攻しはじめたとき，クラークの書評に注意するように教えている。さらに，エリスの論文から約八年後，ハーバード大学の神経学教授ジェームズ・J・パットナムは，『異常心理学雑誌』(The Journal of Abnormal Psychology) の創刊号（1906年2月）に，精神分析を特別に扱った英語では最初の論文を発表した。[16] かれパットナム教授は，精神分析形成期のもっとも早い「学界」での支持者，アメリカ移植の貢献者であるといわれる。その論文は，「精神分析に対する英語でかかれた最初の適切な説明ともいえる。しかし，彼の要約は大体においてフロイトに対して不賛成を示すものであった。」また，「その前年にもボストンのモートン・プリンス博士がフロイトにあてた手紙でフロイトの“有名な仕事”のことをのべ，自分の新しい雑誌の創刊号に論文を書いてほしいといってきたことがあった。ニューヨークでは，スイスから移住した二人の精神医，アドルフ・マイヤーとアウグスト・ホッホの二人がフロイトの著作の後を追っていて，後者は好意を抱いてさえいた。」モートン・プリンスは，アメリカのタフト大学神経病学教授，のちに1927年に Harvard Psychological Clinic を開いた人である。ここにいう新しい雑誌というのは，“The Journal of Abnormal Psychology”の創刊のことであった。[17]

さて，フロイトの精神分析がアメリカの学界へ公式に紹介されたのは，1909年の秋のことであった。それはフロイトじしんの訪米によってであって，ジョーンズの表現によれば，1908年12月，フロイトの人格と業績を今までよりはるかに広く，また遠くにいる人びとに紹介することになる事件がおこった。マサチューセッツ州，ウースターのクラーク大学々長，スタンリー・ホールが大学創立二〇周年記念式典の機会に一連の講演をしていただきたいとフロイトを招待したのである。そして翌年の1909年8月27日，日曜日の夕方ニューヨークに着き，かれの訪米がここに実現された。

フロイトは，クラーク大学での五回の講演をドイツ語でなんの手控えも用意せずにおこなった。直面目な話しかけるような調子で話して，きく者に深い感銘を与えたといわれる。かれはこの講演で，アンナ・O嬢の症例をつかって，彼女のヒステリー症状を先天的な変質としてでなく，心的決定論 (psychic determism) の原理でもって説明した。そして，フロイトは「抵抗」の概念や「願望」と夢の関係や「幼児性欲」説や「エディプス・コンプレックス」や「昇華」の機能など，いくつかの主要な概念について語った。ジョーンズはまたこんなエピソードを伝えている。「聴衆の中にいた一人の女性が，彼が性的な問題について語るのをききたいと熱望して，私に彼に頼んでくれと乞うた。私がその要求を伝えると彼は答えていった。“In Bezug auf die Sexualität lasse ich mich weder abnoch zubringen.”」と。これはドイツ語のままの方がよいが，その意味は，その問題をわざわざ避けもせぬがわざわざ求めもせぬというのであった。[18] さて，それに，とくに感動的であったのは，式典の最後にあたり，大学がフロイトに博士号を授与したことにたいしフロイトが立ちあがって謝辞をのべた瞬間であった。かれの最初の言葉は「我々の努力が公式に認められましたのは，これがはじめてであります」という感謝の言葉であった。これまでの不遇なフロイトにとって喜びの色をかくしえなかったのであろう。また，ウィリアム・ジェームスとの出あいも一つの感動的なシーンであった。当時すでに不治の病にかかっていたジェームスは深い興味をもってフロイトの講演をきいた。きき終ってジェームスは，このウィーンからの来訪者に「心理学の将来はあなたの仕事に属している」と語ったといわれる。スタンリー・ホールの言葉でいえば，このクラーク大学における「精神分析の起源と発展」と題する記念講演は，フロイト理論がアメリカで発展するためのイニシアル・モニュメントであったということである。[19]

とはいっても，一般的にいって，フロイトの思想は当時のアメリカの学界にスムースには受け入れられなかった。たとえば，二，三の例をあげると，ボルティモアで1909年の十二月に開かれたアメリカ心理学協会の会合で，ボリス・シディズはフロイトの仕事に猛烈な侮辱的な攻撃をくわえ，「今やアメリカを侵攻しつつあるフロイト主義の狂える流行病」として痛罵した。それは，人を暗

黒のなかにつれ戻すもので，フロイトじしん，オナイダ共産村や，モルモン教などのような「信心深い性主義者の新しい一員」にすぎぬ，と非難したものであった。また，1910年5月にワシントンで開かれたアメリカ精神学協会の年次大会の宴会のさいに，ニューヨークの神経学者ジョセフ・コリンズは，このうえない趣味のわるさで，アメリカでのフロイトの友人パットナムに下卑た人身攻撃を加える演説をおこなった。かれは，パットナムが先刻おこなったような「生娘についての猥談」からなるペーパーを発表するのを許したことにたいして，協会に抗議したのであった。さらに，有名なニューヨークの神経学者アレン・スターは1912年4月のニューヨーク医学学士院の神経部会で，フロイトを典型的な「ウィーンの放蕩者」とけなした。[20] だから，当初アメリカの学界においても，例外でなく，フロイトの精神分析は激しい攻撃にさらされたものであった。

それが社会学の領域ではどうだったか。たとえば，G. J. ヒンクルによると，「<さきの>ホールの説明は，社会学よりもむしろアメリカの文学，哲学，教育および心理学にぴったりあてはまる。主として社会学者たちは，厳格な道徳によって特徴づけられるプロテスタント的な社会背景からの出身（初期の社会学者たちは牧師ないしその家系からの出身者が多かった——引用者）であったから，精神分析についての手広い議論を避けていた。かれらはフロイト主義と性とを同義語とみなし，また，性の一般的な問題は，かれらの研究の領域外とみなしていた。第一次大戦以前に，社会学者たちは，ただ W. I. タマスの『性と社会』(1907)とH.エリスの『性の心理学的研究』(1898)のみを知っていただけであった。」社会学者たちは，フロイトの理論を公然と研究し評価するのを好まなかったしまたためらったけれども，初期の社会学者たちの精神分析の引用や批評は，本質的にはそれらの考え方とファミリアであることを物語っていた。しかし，それにもかかわらず，「フロイト主義への沈黙は，アメリカ社会学における精神分析の初期の段階（1909～1920）を特徴づけて“用心深くためらった”時期」とするのが妥当なところである，と。[21]

1920年以前の多くの卓越した社会学者たちは，地方的および宗教的環境からの出身者であった。1880年以前に生れたアメリカ社会学会の19名の会長で，1910年までに大学院で研究を終え，1920年までに著名な業績をのこしたかれらには，その幼年期が典型的な都会育ちというのはただの一人もいなかった。これら社会学者たちは，当時の慣習的な，制度化された宗教のイデオロギーや実践には加担しなかった。けれども，ほとんど例外なしに，かれらは基本的には倫理的な問題(ethical issues)に関心をもっていた。この倫理的な問題への関心は，これらの人たちがプロテスタントの宗教的ないし倫理的な伝統がこの国でなお支配力をもっていた時代に成育したことを知るなら納得できる。かれらの改革主義はしばしば，キリスト教的な救済思想の世俗版であり，かれら個人のそれぞれの宗教的な経歴からくる直接のなりゆきであった。レスター・F・・ウォードの母方の祖父，フランクリン・H・ギディングスおよびウイリアム・I・タマスの父などは牧師であったし，また，ウイリアム・G・サムナー，アルビオン・W・スモール，ジョージ・E・ヴィンセント，エドワード・C・ヘイズ，ジェームス・P・リヒテンバーガー，ユリンイス・G・ウェザリー，チャールス・A・エルウッド，およびジョン・L・ギリンなどは，かって聖職のキャリーアをもった人たちであった。[22]

しかしアメリカの社会学には，うえのような初期の社会学者たちの出身背景をのぞくなら，フロイト理論を受け入れうる可能的な素地があったとみるべきであろう。ヒンクルによれば，「……初期の社会学の基本的な関心や仮説は，フロイト心理学の受入れにとってコンジニアルであった。貧困，犯罪，精神異状，自殺および不法行為などの諸問題の説明をもとめて，社会学者たちは，精神分析学者たちが考えているそれと一致するような，四つの基本的な仮説を信奉していた。すなわち，(1)社会学者たちは，自然的および有機的現象を支配している不変の自然法則にたとえられる，人間行動の普遍的で科学的な諸法則を探究する仕事を受けいれた。(2)かれらは，社会変化を社会進化とみて，それをよりよい社会への進歩として説明した。(3)かれらは，上向きの人間発達を，社会学的諸法則の知識を利用して，直接的な人間の改善論的な干渉によって促進されるものと考えた。そして，(4)かれらは，社会行動や社会を個人行動からなるものと考え，とくに結合における個人のモー

ティベーションを強調した」。これら四つの点は，ヒンクルが，じつはアルビオン・スモールが初期の社会学者たちに共通な同意点として指摘したものと結びつけてのべているのであるけれど，このスモールはまた，“nothing in social which is not psychical”とのべ，社会学者たちの「独特な注目の中心と……綜合の原理は，パーソナリティである」とものべていた。[23] それは，ひとくちにいえば，いわゆる voluntaristic な名目論と名づけられる観点であった。そしてたとえば，その立場は，とりわけ初期のアメリカ社会学においては「社会力」(social forces) の概念によって代表されているのではないか，とおもわれる。「社会現象の基本的なソースとしての人間の心的な性質 (psychic nature) に強調がおかれていることは，すべて初期のおもな社会学者たちの著作のなかに見出される社会力の諸理論において明らかである。レスター・ウォードは感情 (emotion) を強調する社会力の理論をのべたし，ウィリアム・サムナーは，人間は，飢え，性愛，空虚および霊への恐怖の諸本能によって動機づけられると信じていた。アルビオン・スモールは，健康，富，社交性，知識，美および公正などの六つの関心 (interests) が人間を行動させると考えた。そして，アメリカで最初の社会心理学の教科書をかいたエドワード・ロスは，ウォードの社会力説とスモールの関心説とを結びつけた。」[24] このように，初期の社会学者たちは，社会現象を究極には個人の動機から説明していたものであった。

さて，社会学の分野で，フロイト理論の可能性をいち早く説いたのは，スタンリー・ホールの「心理学の社会的諸相」(Social Phases of Psychology, 1913) という論文が最初であったといわれる。この論文はアメリカ社会学会の『会報』(Publications of American Sociological Society, 7) にのせられたものであった。このホールについて，ジョーンズはつぎのように書いている。「アメリカの実験心理学の基礎をすえ，青年期について巨大な著述〔『思春期——その心理学とその生理学，人類学，社会学，性，犯罪，宗教並びに教育との関係』(1904)——引用者〕をしたスタンリー・ホールはフロイトにもユングにも熱狂的な称讃を示した。アメリカから帰るとフロイトは彼についてプフィステルにこう書いた。“もっとも楽しい空想の一つは，どこかはるかにはなれたところで，全くこちらの知らぬうちに，我々の思想や努力に入っていっている立派な人びとがいて，その人びとが結局実然姿を現すことです。それがスタンリー・ホールの場合であったのです。はるかなるアメリカで，ボストンからほんの一時間のところに，一人の立派な老紳士がいて『年報』の次が出るのを今か今かとまちうけ，それを読んで，ことごとく理解し，そして，彼自身の言葉によれば，<我々のことを鳴り物入りで吹聴している>とは誰が知っていたでしょうか。”その後しばらくして私はホールに，私がそのころ創設していた新しいアメリカ精神病理学協会の会長になってもらった」と。[25] しかしながら，精神分析にたいするかれの興味はながつづきしなかった。数年後かれはアドラーに従う者となり，その知らせはフロイトをいたく傷つけたものであった。そして，ホールがフロイトをそうしたように，アドラーをアメリカに招いたとき，フロイトはそれについて，「多分，世界を性欲から救い，攻撃の基礎のうえにすえるのが目的であろう」と，このように語ったといわれている。しかし，それはともかく，このホールについでフロイト理論に言及したのは，社会学に関係するものでは，E.B．ホルトの『フロイトの願望とその倫理学における位置』(The Freuchian Wish and Its Place in Ethnics, 1915) と，それにロバート・ゴールドの「社会的諸関係の心理学」(“Psychology in Social Relations,” *Amer. J. Sociol.*, 22, May, 1917) やアーネスト・R．グローブスの「社会学と精神分析的心理学」(“Sociology and Psychoanalytic Psychology: An Interpretation of the Freudian Hypothesis,” *Amer. J. Sociol.*, 23, July, 1917) などが，それであった。

ところで，この時期における社会学者で精神分析のもっとも堅実な解説者の一人は，後者のニューハンプシャー大学のグローブス教授であって，そして，とりわけ「書評」活動をとおしてフロイトの啓蒙につくしたかれの業績は大きく，たとえば，

W. A. White, Principles of Mental Hygiene, in *Amer. J. Sociol.*, 23, May, 1918, p. 841; S. E. Jeliffe, The Technique of Psychoanalysis, in *Amer. J. Sociol.*, 25, July, 1919, pp. 100–101; W. Lays, The Child's Unconscious Mind, in *ibid.*, Nov., 1919, pp. 367–368; W. A. White, Thoughts of a Psychiatrist on the War and After, in *Amer. J. Sociol.*, 26, Sept., 1920 p. 239; W. S. Swischer, Religion and the New Pycholosgy, in *ibid.*, Nov., 1920, p. 376.

などの「書評」がそれであった。[26] グローブスは，上記の1917年の論文を，「ちようどこの過去二〇年間が遠い未来から眺められるようになったとき，おそらくかれらのおもな関心の主張は，かれらが異常心理学という科学の誕生をみたということでないだろうか」と，こういうイギリスの心理学者トロッターの言葉の引用でもって書きはじめている。そしてさらに，「純粋に人間的な観点からなされた心理学の諸問題へのもっとも卓越したアタックは，豊かなジークムント・フロイトの天才が，そのパイオニーアであったしそして依然としてそうであるところのアタックである。かれの仕事が創始した学派は，まず最初，全体的に異常な精神状態の研究に関心をもっていたし，また，ある精神病の治療においてそれが要求しているその諸原理の検証の成巧によって医学の一分野として注目されるようになった。現在それは，正常と異常とをとわず，精神現象に一般に適用される学説として考えられているし，精神の作用についての骨の折れる緻密な研究の産物であるこれらの諸原理は，精神分析として知られる特別な方法の利用によってはじめて可能となったのである」[27] と。まずグロープスは，このようなトロッターの言葉を引用しながら，フロイトの精神分析へのよき理解をしめしていた。

グローブスによれば，「フロイト理論が未来の科学から支持されようがされまいが，社会学は，心的なものが重要だという領域の拡張によって価値ある材料をえるように，たしかに運命づけられている。以前に心理学者たちが満足していたような限定された領域は，社会学の学問的進歩をさまたげていた。あらゆる精神的な経験は精神の諸法則を説明するものであるし，また科学的な説明の価値があると仮定することによって，フロイト派の人たちは将来の心理学は確実な発展の道を歩むであろうと主張している。心理学は小さなコンフォータブルな壁がんから外へ出ることをしいられ，すべての精神現象をとり扱うよりヒロイックな仕事をその開かれた科学のフィールドのなかで引き受けねばならぬ。この野心的なプログラムの名誉の正当な分け前をフロイトに与えたからといって，他の人たちの業積からの影響を必ずしも否定する必要はないし，社会学じたい，とりわけ社会心理学の分野において，心理学者たちが研究のために要求している経験の領域を，拡張する傾向にあった。しかしながら，フロイト理論に反対だからといって，フロイトの仕事がいかに大きく精神科学という野心を増大せしめたかについての認識をこばんだりすることは，公平でない」[28] と。また，かれによると，つぎの三つの点で精神分析の理論は社会学にとって重要な意味をもつという。その三つの点とは，まず第一に，人間の精神的な諸属性というものは，精神病患者のそれのなかにインテンシィブに表現されるというフロイトの考えによって，そこに普遍的な理論を導き出す可能性をもたらしたこと，第二に，生理学の分野を越えて心理学に人間の心的過程の研究をもち込んだこと，そして第三に，人間の精神をつかむ概念として「願望」(wish) を発見したこと，この三つの点である。かくて，まずフロイトの「願望」の概念が「社会力」説をもつアメリカ社会学の伝統のなかに生かされる共通の広場がつくられることになった。

さて，W. I. タマスとF・ズナニエッキが有名な『ポーランド農民』を刊行しはじめたのは，ちようどこの頃から (1918—20) であった。社会学史家フロイド・ハウスのいうように，この本は，アメリカ社会学を「思弁的な段階から実証的な段階」へ進めたということで画期的な意義を有するとされ，その意味で「社会学の古典」とまでよばれた書物であった。そして，この本の第一巻 (1918) のなかでタマスが例の「四つの願望」の概念を展開し，この概念をおり込んでパーソナリティの発達を論じたことは一般によく知られている。それでは，かれのこの「四つの類望」とフロイトのそれとの関係はいったいどうなのだろうか。同

僚のズナニエッキによると，四つの欲求 (desire) を概念化したすぐあとになって，かれはにわかにフロイトの「願望」の概念に関心をもつようになった。かれはリビドーの概念をうけ入れはしなかったけれども，それまで用いていた「欲求」の言葉を「願望」という言葉にかえ，いくぶんフロイト的な分析のやり方で「不適応なパーソナリティ」の分析にこの四つの願望を適用するようになったと，このようにのべている。[29] さらにヒンクルは，タマスとフロイトの二つの「願望」の概念のあいだに類似性があるとして，つぎの四つの点を指摘している。すなわち，第一に，ともに目標をもとめる人間の普遍的な性向であるという点，第二に，その内部で，あるいは外部にたいしてたえず葛藤をもっているという点，第三に，適応行動には感情的な要因が含まれているという点，そして第四に，たえ間ない葛藤は個人の進化や社会変化の源泉 (source) であると考えられた点，この四つの点である。[30] また，R. E. パークと F. W. バージェスは『社会学の科学への序説』(1921) という編著のなかで，このタマスの「四つの願望」の概念を賞揚しつつ，さらにホルトの前掲書 (1915) からの一部を援用することによって「願望」の概念をフロイトのリビドーの概念にそって規定し，それと「態度」(attitude) との関係を明らかにしていた。パークとバージェスのこの本は，「社会学としてはフロイト理論を導入した最初のテキストブックであった」とされている。[31]

ところで，フロイト理論とアメリカ社会学について語るばあい，いま一つ，1918年頃までの W. F. オグバーンの果した役割をみ過してはいけないのではなかろうか。かれはコロンビアの大学院に在学中，一時クラーク大学のレクチュアーにきていたF・ボアズのセミナーでフロイト理論について聴いたし，また，A・ゴールデンワイザーの私宅の研究会にも出席し，そこで Louis Lorwin が，フロイトの Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie, 1904 —— ブリルの英訳は 1910 年——について批評しているのを聴いたこともあった。それに刺激されて，かれはフロイトの書物をつづけて二，三冊読んだようである。オグバーンがフロイトの精神分析に積極的に興味をいだいたのは，この頃から1918年の暮れ—— T. Burruw から didactic psychoanalysis をうけた頃——にかけてであったけれど，それはコロンビア大学から学位をえたのち，おもにオレゴン州ポートランドのリード大学の教授として過した時代であった。また，かれの友人で「産業精神病」で著名なアメリカの労働経済学者，C. H. パーカーが，かれからはじめてフロイトについて学んだというのは，1915年のことであった。そして，フロイトの翻訳家として著名な A. A. ブリルは，「オグバーン教授は，わたしの知るかぎりでは社会学の講義で，フロイト理論の価値を最初に認めた社会学者であった」というようにいっていた。[32]

ここで当時のアメリカの思想状況をちょっとスケッチしてみるなら，つまり，第一次大戦後のアメリカ社会科学の思想の傾向についてであるけれども，たとえば，トマス・C・コクランは，第一次大戦後の状況を，「古き誤りからぬけ出す順調な途上にあったはずのアメリカが，史上もっとも血なまぐさい，犠牲の大きい戦争の一つにまきこまれたすえに，主として保守的な経済学者と富裕な実業家とを喜ばせる社会秩序をつくり出したのである。あきらかに，戦前の社会科学者の描いたアメリカの何かが狂ってしまった」と，このようにペシミスティックに描くのである。そして，かれによれば，

> 疑いもなく，無邪気な時代が崩壊して，1920年代の幻滅へかわり，輝ける希望から疑惑と混乱へと知識人のアメリカ像が変貌したのは，……多くの要因にもとづいていた。戦争そのものがとくに陰惨なものであり，およそ光輝ある行動や，勝利の結実のないものであった。
>
> そこに見られたのは泥濘と殺戮と古い力の均衡をすこしでも変化させようとする駆け引きのみであった。新しい世界秩序の設立という理想に燃えたウイルソンの短い活動の時期は，ほとんど始まったとたんに終りをつげた。第一次大戦はロシアに革命と独裁政治をもたらし，アメリカの政治理念にかってないほどの脅威を与えた。20年代の表面上の繁栄にもかかわらず，アメリカの経済体制はそれ以前の年代ほど急速に発展してはいなかった。多くの農民が借財に悩んでおり，雇用状態もひどく不安定であった。禁酒法は政治的腐敗に拍車をかけ社会的エリートの間では酔っぱらいが増えた。国の政治の主導権は現状にほとんど挑戦しよう

とはしないものの手におちた。

そのうえに，二つの思想があらわれて無邪気な時代の合理的楽観主義をうちこわすことになった。[33]

ここにいう「二つの思想」とはなにか。この二つの思想は「戦前のほとんどの社会科学者にはおそらく知られていなかったもの」であるが，しかしそのひとつは，すでに長い歴史をもつものであって，「われわれの感覚や頭脳は実在の本性を捉え，理解する能力がない」とする自然科学にもとづく証明であった。哲学者たちは，もちろんこうした可能性をいつも考えていたけれど，それは一九世紀末にあってはじめて科学的真実として大きな権威を与えられたのであった。「実在を把握するためには，言語論理は不適当なものであり，数学的，あるいは記号的論理が必要であるという認識が，徐に広がっていった」のである。

そして他のひとつは，フロイトの思想がそれであった。たとえば，コクランによれば，「一方，直接知覚した結果を合理的に使うことにたいして，独自の攻撃がウィーンのシグモンド・フロイドによって始められた。アメリカの改革者は，フロイドの立場に傾き，うしろ暗い経済的動機をより強調し，公平な理性を軽視したのであった。……フロイドの結論は，みかけは理性的な行為であっても，無意識の欲求，多くの場合，押えられた性的欲求からくるものによって支配されているというのであった。このフロイドの理論は，改革者からその根本的なよりどころ，すなわち，市民は広い教育を受けるならば，社会のためになることを行うという根拠をとり去った」。

フロイドは，自分の業績を過小に示すような男ではなかったから，無意識の心の発見をコペルニクスの革命や，ダーヴィニズムと同列においたのである。ウィーン学派の理論は，やがてクラーク大学のG・スタンレイ・ホールによって紹介され，フロイドは1910年（？—引用者）にそこで講演した。しかし，フロイド学説の社会的，哲学的意義が一般に認識されたのは，第一次世界大戦以後のことであった。

フロイドの療法によって，戦争によるある種の精神異常が治療されたことと，宣伝に反応する無意識のはたらきが認められたことによって，戦後，新しい心理学に関する著作が氾濫することになった。フロイドの理論は全ての社会科学の中に，おおっぴらにまたひそやかに侵入した。ウォルター・リップマン（Walter Lippmann）は『世論』（Public Opinion, 1922）の中で，大衆が感情的に条件づけられた定型によって考えていることを示した。

1920年代の終りに，ハロルド・ラズウェル（Harold Lasswell）は『精神病理学と政治』（Psycho-Pathology and Politics）を著した。W. I. トーマス（W. I. Thomas）の社会学の著作が，フランツ・ボアズ，ロバート・ルウイやルース・ベネディクト（Ruth Benedict）などの人類学者の未開文化に関する研究は，フロイド的考察をとりいれたものであった。心理学の分野において，ジョン・B・ワトソン（John B. Watson）は無意識の影響を極端にまで押しすすめて，意識的思考の存在を否定した。彼の行動主義学派にしたがえば，表面にあらわれた思考や行動は，すべて条件反応の結果であるというのであった。[34]

さらに，コクランによれば，「……根本的な不確かさのために，二〇年代の雰囲気は，すべての社会科学を通じて，アメリカ社会についての包括的なイメージを組みたてようとするものではなかった。」絶対的価値の混乱は，プラグマティックな方法にふくませていた相対性をつよめ，その結果，哲学においてはなおいっそうに「論理実証主義」の純然たる経験的概念へと傾くことになった。

社会学において，この時代の学者は，社会全般の性格について，仮説を設定することを避け，都市，人口，犯罪，家族といった特定の分野の経験的観察にもっぱら努力を集中した。例えば『アメリカ社会学雑誌』（American Journal of Sociology）は二〇年代の後半には一年毎に社会変化に関するシンポジウムをのせていたのであるが，1925年の特別号では，すべての論文が特定の論題についてであった。

編集者のウイリアム・F・オグバーン（William F. Ogburn）は，その号への一頁にわたる序文を述べた。「ここに集められた論文の大部分はもちろん事実にもとづくものであり，結論と分析は資料からひきだされたものである」。人類学者もまた，初期の年代の自信にあふれた一般化から後退をみせた一例であった。

フランツ・ボアズは1928年に『人類学と近代生活』を書いたが，一般法則や原理を避けた。彼は「われわれのなしうる唯一のことは，われわれがなしつつあることを一日一日観察し，それらを既存の知識に基づいて検討し，それにしたがってわれわれの進路を形成することである」と結んでいる。[35]

これはまた，戦後のアメリカの「リベラルな実用主義」の特徴をしめしている。そして，それを支えていた表面上の「繁栄」も29年の大恐慌によってあとかたもなく消え去って，30年代以降，社会科学は，不況や第二次大戦を背景に，しばしば「官僚主義によって利用」（ミルズ）されるようになった。

さて，アメリカの社会学界で，フロイト理論がはじめて公式に認められたのは，第一次大戦後の1920年のことであったといわれる。すなわち，この年の12月に主都ワシントンのコロンビア特別区で開かれたアメリカの社会学会の第15回年次大会で「精神分析の社会的意義」(Social Significance of Psychoanalysis) というテーマのもとに円卓討論の一部会がもたれた。おもな参加者の顔ぶれは，E・A・グローブス，W・A・ホワイト，E・R・シュポールディング，P・プランチャード，C・A・ロビンソン，それにR・A・ピータースの各教授であった。バージェスの言葉によると，これは "first official recognition of psychoanalysis by sociologists" であったということである。[36] また，当時社会学内部の事情も変りつつあって，たとえば，(1)第一次大戦後に新旧世代が交代し，アメリカ社会学会の主導権が東部から中西部——シカゴ大学中心——へ，そして若い世代の学究に移ったこと，(2)社会学会における研究テーマの特殊化がつよく叫ばれ，当時アメリカ社会学会の会長であったE.C.ヘイズの提案もあって，アメリカ社会学会の大会がこれまでの年次別の統一的なテーマから各自のもつ興味や関心本位に新しい方針で運営されるようになったこと，(3)同時に，社会諸科学のあいたの「共同研究」の必要から隣接科学への関心——たとえば，「社会科学研究協議会」(1923) やイェール大学の「人間関係研究所」(1928) の設立はその成果——が非常に高まってきたこと，さらに(4)第一次大戦の悲劇によって，戦後の社会学者のあいだではかっての合理性への信仰や社会進歩の観念が失われ，人間の非合理性というペシミズムが一般に支配的になったこと，などの新しい諸傾向がてできた。

ところで，この時期にはシカゴ大学を中心とする新しい社会心理学——シカゴ学派の interactionist social psychology——のめざましい台頭があった。たとえば，そのまえに，1908年に二冊の社会心理学の教科書が世にでていた。そのひとつは，イギリスの心理学者ウィリアム・マクドゥーガルの『社会心理学入門』という本であり，他のひとつはエドワード・ロスの『社会心理学』という本がそれであった。これらは，ともに生物学的に指向しており，とりわけ後者のマクドゥーガルは，人間の本能についてはじめて体系的な説明をしていた。そしてそのご，本能論は大きな影響力をもったけれども，やがて20年代のはじめに，それがL.L.バーナードやE.ファーリスなどによって攻撃されることになった。「この本能説攻撃の火の手は，バーナードがその『本能論，社会心理学管見』(1924) を上梓した時に始まる。彼は従来の本能論が形式的な本能の分類に終り，パースナリティの生育に対する環境的条件を無視したことを指摘し，それが全く無意味な用語的遊戯であると論難した。彼は1,700名の著者による約2,000冊の著書を検討し，約6,000種の類型と，16,000の個別本能が，少くとも学説的には存在することを示し，従来の本能論が如何に独断的・夢想的な科学的使用にたえぬ臆説であるかを明らかにした。また彼はパースナリティが，所謂本能を離れて如何様に発達するかを示し，それが遺伝にはよらずに，環境的条件に基き形成されることを明らかにしたのであった。バーナードによれば，これらの環境的学習により典型化された人間の行為は習慣 (habits) と呼ばれ，学習を経ずして成立する人間の行為に対しては，反射 (reflexes) の語が与えられた。これらの概念の周密な使用によって，環境的諸条件が人間のパースナリティ中に含まれる生物的本性をどのように変革するかを，明らかにし得るというのであった。」[37] そして，本能論の凋落とともに，それに代って，上述の相互作用説的な社会心理学が展開されることになった。

この社会心理学の代表的な学者は，チャールス・クーリー，ジョン・デューイ，ジョージ・H・ミード，およびウィリアム・I・タマスなどであるが，このうちクーリーをのぞきシカゴ大学に属していたから，かれらの社会心理学は，社会学の「シカゴ学派」とともに，「社会心理学のシカゴ

学派」(the Chicago school of soocial psychology) とよばれている。たとえば,「社会的相互作用論者によれば本能のような生物学的要因は,パーソナリティの形成や成長には,なんら決定的な役割を演じるものではない,とされる。コドモは,生れた直後は人間的なものでも社会的なものでもなく,たんにある特定の生物学的な種に属する動物有機体 (an animal organism) である。ふつうコドモは,小さな, face to face の社会集団——家族——のなかに生れ,そこで両親や兄弟姉妹やその他の人たちと社会的相互作用を営み,そして言語や行動のパターンを習得し,また,その社会の価値や目標とファミリアになりそれらを受け入れるように仕込まれる。この集団の文化を教え込まれることと平行して,かれは自我 (self, ego) としてじぶんじしんという観念を発展させるが,その自我というのは他者の期待や内面化された集団の道徳的基準にたいして敏感に反応するがゆえに,かれは,ますます,人間的で社会的な存在になるのである。……<そして>その個人的な成長につれて,かれは,コドモのころに習得したパーソナリティを,つまり第一次集団のなかで習得した態度や価値を,他の社会状況にもうまくあうよう,発展させモディフアイしてゆくのである。」[38]そして,こういうパーソナリティ発達の理論,これこそシカゴ学派の特色をしめすものであった。この特色は,もうちょっと整理するなら,(1)第一次集団(とくに家族)の重視と,(2)文化的パターンの「内面化」(internalization) のメカニズムの発見,この二つに要約できるのではないかとおもわれる。クーリーの「鏡に映った自我」の概念や,また,G.H.ミードの「一般化された他者」や「他者の役割取得」の概念など,これらシカゴ学派の社会心理学を支えるいくつかの概念は,フロイトの「超自我」の概念とともに,それ以後,といわけ第二次大戦後,アメリカ社会学のうえでたいへん重要な役割を演じるのであって,それらについては,あとでパーソンズやミルズの社会学について論じるさいに,もういちどとりあげるつもりである。しかし,それはそれとして,だから本能論批判とそれにつづく新しい社会心理学の展開は,この年代にフロイト心理学が社会学の領域で official に認められたとはいえ,それはすでに,さきにのべたフロイトの影響の「第一の時期」から「第二の時期」への転換の可能性を予想するにたるだいじな出来事のひとつであったと考えられる。本能論批判の口火をきったバーナードは,すでに1923年に「本能と精神分析学者たち」(“Instincts and the Psychoanalysts”, *Journal of Abnormal and Social Psychology*, Jan-March, 1923) の論文を書き,精神分析学者たちの本能論の誤謬を指摘していた。(以下次号)

注 1) S・ヒューズ『意識と社会』　生松・荒川訳,みすず書房,1965,46ページ。
2) 上掲書,24ページ。
3) 上掲書,12ページ。
4) 北川隆吉編『講座現代社会学(1)——社会学方法論』青木書店,1965,208ページ。
5) 丸山真男『日本の思想』　岩波新書,1961,82ページから。
6) 北川編,前掲書,208ページ。
7) ヒューズ,前掲書,105ページ。(Freud, *Future of an Illusion*, pp. 96–7.)
8) 上掲書,36〜37ページ。
9) E・ジョーンズ『フロイドの生涯』　竹友・藤井訳,紀伊国屋書店,1965,160〜161ページ。
10) 上掲書,170ページ。
11) J. A. C. ブラウン『フロイトの系譜』　宇津木・大羽訳,誠信書房,1963,30ページから。
12) ジョーンズ,前掲書,176ページ,および181〜182ページ。
13) 上掲書,3ページ。(ライオネル・トリリングの「まえがき」参照。)
14) 最近の研究では,ヒンクル女史の “Sociology and Psychology,” in H. Becker & A. Boskoff (eds.), *Modern Sociological Theory*, The Dryden Press, 1957. がもっともよく書けている。なお,彼女は,“The Role of Freudianism in American Sociology” (1951) で,ウイスコンシン大学から Ph. D. の学位をえている。また,H. M. Ruitenbeek, (ed.), *Psychoanalysis and Social Science*, E. P. Dutton & Co., 1962. もよい参考になる。そのほか,このテーマを直接かかげた研究としては,E. R. Groves, “Sociology and Psychoanalytic Psychology,” *Amer. J. Sociol.*, 23 July, 1917; R. Bain, “Sociology and Psychoanalysis,” *Amer. soc. Rev.*, 1 (April, 1936); E.W. Burgess, “The Influence of Gigmund Freud upon Sociology in the United States,” *Amer. J. Sociol.*, 45 (Nov., 1939); K. Young, “The Impact of Freudian Psychology on Sociology,” *Amer. J. Ortho.*, 10 (Oct., 1940); H. Hartman, “Psychoanalysis and Sociology,” in S. Lorando, ed.,

Psychoanalysis Today, 1950. などの諸論文があげられる。またわが国のものでは，山根常男「社会学と精神分析」(『社会学評論』 第9巻，第4号，1959) の論文がある。

15) ジョーンズ，前掲書，254～255ページ。

16) *The Journal of Abnormal Psychology*, 1906, I. 26, (II). オバーンドルフによれば，「おそらく，アメリカで最初にフロイドの仕事に注目したのは，1895年に "The New England Invalid" についてのレクチュアーで，"Breuer and Freud's hypothesis about hysteria" にふれ，それを受け入れた Dr. Robert Edes であった」とのべている。そして，そのときは，『ヒステリー研究』(1895)がでたばかりのときで，そのまえに，1893年に論文がでていたとはいえ，それは Edes の「異常なまでの機敏さ」をしめすものであった，と。(Clarence P. Oberndorf, *A History of Psychoanalysis in America*, Harper Torchbooks, 1953, p. 41.)

17) ジョーンズ，前掲書，255ページ。

18) 上掲書，271ページ。

19) G. J. Hinkle, op. cit., in *Modern Sociological Theory*, The Dryden Press, 1957, p. 575. (G. S. Hall, *Life and Confession of a Psychologist*, 1923, p. 332.)

20) ジョーンズ，前掲書，308ページ。

21) Hinkle, *op. cit.*, p. 576.

22) R. C. Hinkle, Jr. & G. J. Hinkle, *The Development of Modern Sociology: Its Nature and Growth in the United States*, Doubleday, 1954, p. 3.

23) Hinkle, *op. cit.*, pp. 576–577. (A. W. Small, "Points of Agreement Among Sociologists," *Publications of the American Sociological Society*, 1, 1907.)

24) *Ibid.*, p. 577.

25) ジョーンズ，前掲書，272ページ。

26) Hinkle, *op. cit.*, p.578n.

27) Groves, *op. cit.*, p. 107. かれの引用は，Trotter, *Instincts of the Herd in Peace and War*, 1916, pp. 70–71. からである。

28) *ditto*, p. 109.

29) Hinkle, *op. cit.*, p. 581.

30) *Ibid.*, p. 581.

31) E. W. Burgess, *op. cit.*, p. 365. なお，この社会学教科書には，ホルトの The Freudian Wish and Its Place in Ethnics, 1925 の一部と，ワットソンの "Freudian Wish" (from his "The Psychology of Wish Fulfillment," in the *Scientific Monthly*, III, 1916, pp. 479–86.) が再録されている。

32) A. A. Brill, "The Introduction and Development of Freud's Work in the United States," *Amer, J. Sociol.*, 45, Nov., 1939, p. 365.

33) R. E. スピラー他編『現代アメリカの文化像』同志社大学アメリカ研究所訳，弘文堂，1965，84～85ページ。

34) 上掲書，86～87ページ。

35) 上掲書，87ページ。

36) Burgess, *op. cit.*, p. 364.

37) 菊地・村上『20世紀アメリカ社会学の展望』一古堂書店，1955，89ページ。(Hinkles *op. cit.*, p. 29.)

38) Hinkles, *op. cit.*, p. 30. この理論は，「その胎成的形態を，既にウイリアム・ジェームス，ジェイムス・ボールドウィンの著作に見ることが出来る。とくにボールドウィンの『精神発達に於ける倫理的解釈』(1913)は，クーリーに対して多大の影響を与えたといわれる。彼の理論は，主としてヨーロッパのふたつの代表的な理論に強く影響を受けたものである。即ち彼は，自我は一有機体内に於いて自発的覚醒を行う基体であるとするドイツ観念論と，イギリスのダーヴィン主義の理論を借りて，幼児の精神的発達に対する科学的究明を行おうとした。ボールドウィンは，パースナリティの発達過程に於ける，生物学的要因と社会的条件の相互関係を強調した先覚者と称することが出来るのである。」(上書掲，61ページ。Hinkles, *op. cit.*, p. 30.)